

報告

## 別科における日本語教育カリキュラムの改編

— 「楽しむ力」「生きぬく力」を日本語教育にどのように組み込むか—

Revision of the Japanese Language Education Curriculum in the Institute of Japanese Language, Osaka University of Tourism: How to Incorporate “the Ability to Enjoy” and “the Ability to Survive” into Japanese Language Education

上田直人\*  
UEDA Naoto

In preparation for the application to become a Certified Japanese Language Education Institution, Institute of Japanese Language, Osaka University of Tourism (Bekka) has reorganized its curriculum under the supervision of the chief instructor. Referring to the guidelines of the Agency for Cultural Affairs and MEXT, a unified curriculum for all levels and classes was developed and implemented in April 2025. The new curriculum emphasizes detailed assessment of five language skills, aiming to help students progress from A1 to B2 level within two years, enabling internal advancement to the university. This report outlines the curriculum reform process and discusses future perspectives for Japanese language education at the Bekka.

キーワード：日本語教育 (Japanese Language Education)、日本語教育カリキュラム (Japanese Language Education Curriculum)、教育理念 (Educational Philosophy)、教育評価 (Educational Evaluation)、楽しむ力 (the ability to enjoy)、生きぬく力 (the ability to survive)

### 1. はじめに

2024 年 4 月 1 日に『日本語教育の適正かつ確実な実施を図るための日本語教育機関の認定等に関する法律 (以下、日本語教育機関認定法)』が施行された。この法律により、日本語教育機関は『認定日本語教育機関』として、教員個人は『登録日本語教員』として認定されることになった。また法律施行により、日本語教育機関及び、教員も経過措置期間である令和 11 年 3 月 31 日まで (一部の登録日本語教員の経過措置は令和 15 年 3 月 31 日まで) に文部科学省から認定を受けることが必要になった。

大学における別科も例外ではなく文部科学省による「留学のための課程」認定が必要であり、大阪観光大学別科 (以下、別科) においても、「留学のための課程」認定のために「明確な教育理念の整備」「教育カリキュラム作成」に着手することになった。

本稿では、別科における「教育理念の整備」について報告するとともに、2025 年度から試験的に運用している新カリキュラムの概要について説明する。

### 2. 教育理念・教育目標・教育方針の作成

『日本語教育機関認定法』第二条三項(2)に、『認定日本語教育機関』として認定されるためには、以下の事項について文部科学省令で基準に適合することとの記載がある。

- イ 日本語教育課程を担当する教員及び職員の体制
- ロ 施設及び設備
- ハ 日本語教育課程の編成及び実施の方法
- ニ 日本語に通じない生徒が我が国において学習を継続するために必要な学習上及び生活上の支援のための

\*大阪観光大学別科/日本語教育

## 体制

また、文部科学省による『認定日本語教育機関日本語教育課程編成のための指針（令和 6 年 10 月 15 日改定）』によると、教育課程編成のためには「各機関の教育理念や教育目標、特色に照らし、当該教育課程において主に対象とする学習者（生徒）の学習目的や特性等を踏まえた、適切な教育内容、特に、学習者（生徒）が希望する進路に送り出すために、必要かつ独自性のある教育内容を工夫し、実施することが求められる」と記載されており、文部科学省令の基準に適合するためには各機関の教育理念、教育目標が重要であると考えられる。

しかし、2024 年以前の別科には、教育理念や教育目標が制定されておらず、教育カリキュラムの編成にも着手ができなかった。そこで、2024 年 9 月より別科の教務を中心として、別科における「教育理念」「教育目標」「教育方針」の作成チームを発足し、手直しを経ながら案を作成した。その後、2025 年 2 月の別科会議において作成案が承認され、完成へとこぎ着けた。

### (1) 教育理念

別科における必要事項は大阪観光大学に準用しているため、教育理念の作成にあたって大阪観光大学の教育理念を準拠した。大阪観光大学では『大阪観光大学憲章 2022』<sup>1</sup>にあるように、「自由を共に楽しみ、社会を共に生きぬく」を基本理念としている。別科でもその理念を踏襲し、更に別科では主に日本語教育を行うため、「日本語学習を通じて、自由を共に楽しみ、社会を共に生きぬく」を教育理念とした。

また、教育理念の説明として、以下のような説明を加えた。

『大阪観光大学の理念である「自由を共に楽しみ、社会を共に生きぬく」という精神のもとに、学生が日本語の学習を通じて、自分がやりたいこと、好きなことを発見できるように支援します。また、学生が日本における経験を通じて、仲間と協働し自らを発展させていく「楽しむ力」「生きぬく力」を身につけ、様々なことに挑戦できるよう支援します。』

学生は別科において、ただ日本語だけを学ぶだけではなく、日本で持続して学び、「楽しむ力」を養成していく上で必要な原動力となる「自分がやりたいこと」「好きなこと」を見つけることを別科における主なスローガンとした。また、ただ 1 人で日本語を学んでいくのではなく、「仲間と協働」して自分の意識を発展させて社会を「生きぬく力」の基礎を身に付けることも目的としている。

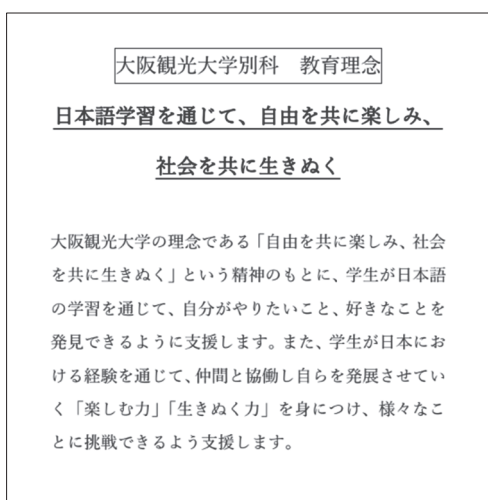


図-1 大阪観光大学別科 教育理念

<sup>1</sup> <https://www.tourism.ac.jp/asset/files/charter.pdf>

## (2) 教育目標

教育理念の作成とともに、別科における教育目標の作成も行った。教育目標は学生の目線で別科在籍期間において達成すべき目標である。そのスローガンは教育理念を基に、『わたしたちは「自由を共に楽しむ力」「社会を共に生きぬく力」を身につけ、自分がやりたいこと、好きなことを発見し、様々なことに挑戦します。』とし、更に、別科在籍期間において身に付けるべき能力を以下のように設定した。

- ①日本語学習を通じて、「他者と共に楽しみ、協働することができる力」を身につけます。
- ②日本語学習を通じて、「日本語を使って他者とコミュニケーションができる力」を身につけます。
- ③日本語学習を通じて、日本で学ぶ上で必要な「基本的な日本語力」「アカデミック日本語」を身につけます。
- ④日本語を使ったコミュニケーション活動を通し、「論理的思考力」「創造力」を身につけます。
- ⑤日本語を使ったコミュニケーション活動を通し、「社会とのつながり」を意識し、「人間関係力」「異文化・多文化を受容し理解する力」を身につけます。

文化庁『日本語教育の参照枠 報告』(2021)では、CEFR(ヨーロッパ言語共通参照枠)に基づきコミュニケーション言語活動として「受容」「産出」「やり取り」「仲介」の四つから構成され、それぞれの言語活動を設定しているが、別科における言語教育もこれに準じて①②③は「受容的言語活動」(主に「聞く」「読む」)、「産出的言語活動」(主に「書く」「発表」)を通し身につけるべき能力と定義した。また、④⑤は「相互行為的言語活動」(主に「やり取り」)と「仲介活動<sup>2</sup>」(例えば、テキストの内容や複雑な情報をわかりやすく他の人に伝えたり、異なる立場の人々の間で、対立を解消し、合意形成を促したりする活動)を通し、身につけるべき能力である。①～⑤の能力を身につけることにより、「自由を共に楽しむ力」「社会を共に生きぬく力」の基礎が築けるのではないかと思われる。

---

<sup>2</sup> 櫻井・奥村(2021)によれば「仲介活動」は「テキストの仲介」「概念の仲介」「コミュニケーションの仲介」の三つのカテゴリーに分類され、受容・産出・相互行為活動の仲介を通して、他言語・多文化への気づき、配慮、理解が高まるとしている。

| 大阪観光大学別科 教育目標  |
|--|
| <p><u>わたしたちは「自由を共に楽しむ力」「社会を共に生きぬく力」を身につけ、自分がやりたいこと、好きなことを発見し、様々なことに挑戦します。</u></p> <p>①日本語学習を通じて、「他者と共に楽しみ、協働することができる力」を身につけます。</p> <p>②日本語学習を通じて、「日本語を使って他者とコミュニケーションができる力」を身につけます。</p> <p>③日本語学習を通じて、日本で学ぶ上で必要な「基本的な日本語力」「アカデミック日本語」を身につけます。</p> <p>④日本語を使ったコミュニケーション活動を通し、「論理的思考力」「創造力」を身につけます。</p> <p>⑤日本語を使ったコミュニケーション活動を通し、「社会とのつながり」を意識し、「人間関係力」「異文化・多文化を受容し理解する力」を身につけます。</p> |

図-2 大阪観光大学別科 教育目標

### (3) 教育方針

学生が教育目標を達成していくためには、教員による支援が必要となる。そこで、教員が学生を支援できるように、文化庁『日本語教育の参照枠 報告』(2021)を参考に、教育方針を策定した。そのスローガンは「教員一人ひとりが学生を尊重し、学生の自律学習を促し、自立した言語使用者<sup>3</sup>になれるよう手助けをします。」とした。「自律学習 (autonomous learning)」は「学習者オートノミー(learner autonomy)」によって実現される学習方法であり、青木・中田(2011)によると、「自分の学習に関する意思決定を自分で行うための能力」とされている。また、『認定日本語教育機関日本語教育課程編成のための指針 (令和 6 年 10 月 15 日改定)』では教育課程作成のための「学習内容」に「学習を自ら管理する能力」を踏まえることを明記している。

以上のことから、別科では教員の在り方を「日本語を教える」のではなく、学生が自身の学習を管理できるように自律学習を促し、「学習の手助けをする」ことに重きを置いた。この「手助け」を実現するべく、教育の方針とし五つを挙げた。

- ①教員は「日本語教育の参照枠における言語教育観の三つの柱<sup>4</sup>」を意識し、学生を社会の参画者として尊重して授業を行います。
- ②教員は『日本語教育の参照枠』、『CEFR』の Cando を指標にし、学生が 5 技能(書く・話す【やりとり】・話す【発表】・聞く・読む)における「自立した言語使用者」(B2~B1)になれるように授業を行います。

<sup>3</sup> 『日本語教育の参照枠 報告』(2021)や CEFR (2001)では言語学習者のレベルを A1・A2・B1・B2・C1・C2の六つに分け、更に A を「基礎段階の言語使用者」、B を「自立した言語使用者」、C を「熟達した言語使用者」の三段階としている。また、「留学のための課程」の設置には到達レベルとして B2 以上(「自立した言語使用者」)を目標として置くことが必要とされている。

<sup>4</sup> 『日本語教育の参照枠 報告』(2021)では「言語教育観の柱」とは「1 日本語学習者を社会的存在として捉える」「2 言語を使って「できること」に注目する」「3 多様な日本語使用を尊重する」としている。「言語教育観の柱」では学習者を社会の一員として捉え、自身の言語能力を使って何ができることに着目をし、更に画一的な見方ではなく、学習者一人一人の個別の能力や日本語使用を尊重することが謳われている。

- ③教員は学生の「規範意識」「相互啓発力」「リーダーシップ」を養成するために、行動中心アプローチ<sup>5</sup>の考え方を授業に取り入れ、活動を中心とした授業を行います。
- ④教員は学生の「自発的に楽しく学ぶ」能力を養成するために、ポートフォリオ等を通し、学生の学習に対する目標設定をサポートし、自律学習を促します。
- ⑤教員は課程の到達目標を理解し、小テスト、定期試験、Cando 評価、また、ロールプレイや会話能力テストなどのパフォーマンス評価、学生の自己評価を通じて、学生の 5 技能を正しく評価します。

①～⑤は別科における教育に携わる教員全員が「学習の手助けをする」という共通意識を持てるように、具体的な指標、授業の仕方、評価の仕方を基本的な方針を組み込んだものである。別科における新カリキュラムを作成するにあたって、この方針をもととした。

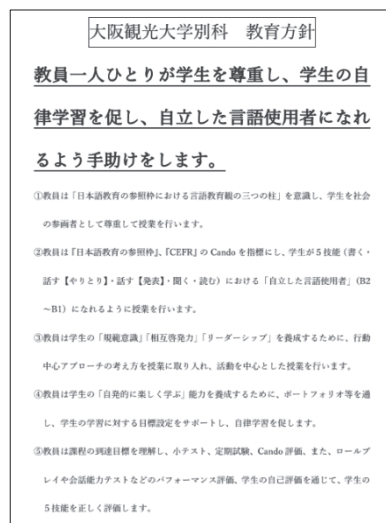


図-3 大阪観光大学別科 教育方針

### 3. 新カリキュラムの概要

2024 年 9 月から先述の別科における「教育理念・教育目標・教育方針」を作成したが、別科教務では 2025 年 4 月に新カリキュラムの試験運用に向けて、「教育理念・教育目標・教育方針」に基づいた新カリキュラム作成も並行して検討を重ねてきた。本章では 2025 年 4 月より試験運用している新カリキュラムについて説明する。

#### (1) レベルとコースの明確化

2024 年以前の別科は学生のレベルについて統一された見解はなく、「初級」「初中級」「中級」・・・などのように分けていた。また、コースデザインも曖昧であり、明確な目標設定もされていなかった。しかしながら、『認定日本語教育機関日本語教育課程編成のための指針（令和 6 年 10 月 15 日改定）』では「教育課程の到達目標・到達レベル」「修業期間・学習時間」「レベル設定及び学期」について詳細に記載されることが求められている。そこで、まず、レベルとコースデザインについて見直し、2025 年 4 月より以下のように変更した。

<sup>5</sup> 『日本語教育の参照枠 報告』（2021）によると、行動中心アプローチとは「多様な背景を持つ言語の使用者及び学習者を、生活、就労、教育等の場面において、様々な言語的/非言語的な課題（tasks）を遂行する社会的存在として捉える考え方のことである」としている。

## 1) 別科における日本語レベル

『日本語教育の参照枠 報告』(2021) 及び、CEFR (2001) を参考に別科における学生の日本語レベルを以下のように五分類とした。

表-1 大阪観光大学別科におけるレベル区分 (2025 年 4 月)

| 別科におけるレベル名 | CEFR (2001) のレベル | クラス名  | 学習時間/期間               | 主な日本語学習教材        |
|------------|------------------|-------|-----------------------|------------------|
| B2 レベル     | B2               | A クラス | 600 単位時間(300 コマ)/9 ヶ月 | 『人と社会をつなぐ日本語 上級』 |
| B1 レベル     | B1               | B クラス | 200 単位時間(100 コマ)/3 ヶ月 | 『人と社会をつなぐ日本語 中級』 |
| A2②レベル     | A2               | C クラス | 200 単位時間(100 コマ)/3 ヶ月 | 『人と社会をつなぐ日本語 中級』 |
| A2①レベル     |                  | D クラス | 400 単位時間(200 コマ)/6 ヶ月 | 『つなぐにほんご初級 2』    |
| A1 レベル     | A1               | E クラス | 200 単位時間(100 コマ)/3 ヶ月 | 『つなぐにほんご初級 1』    |

後述のコースや実際の学生のレベルによってスタート時期は異なるものの、学生は入学した際のプレースメントテスト(筆記試験・口頭試験)によって、CEFR に準じたレベルに分けられる。その後、「学習時間」内の評価に応じて、昇級が確定する。このレベル制度の導入により、クラスにおける学習者のレベルのばらつきをできるだけ排除し、効率よく指導ができ、教育のクオリティ向上が期待できる。

## 2) 別科におけるコース

別科では全部で「2 年コース」「1 年 9 か月コース」「1 年 6 ヶ月コース」「1 年コース」の全部で 4 コースがある。このコースは以前より変更がない。しかし、コースにおける具体的なコースデザインや具体的な目標は検討されておらず、明記もされてこなかった。そこで、新カリキュラムの作成に先立ち、2025 年 4 月からのコースについて検討を行った。新たなコースデザイン案が以下の通りである。

表-2 大阪観光大学別科におけるコース概要 (2 年コース)

|           |  |
|-----------|--|
| 目的        | 本コースは大阪観光大学をはじめ、日本の大学、専門学校など日本の高等教育機関への進学を目指す日本語能力 A1 (JLPT N5 相当) 以上の者が、2 年間別科において日本語を学ぶコースである。また、学生が 2 年の課程で本別科の教育目標である「自由を共に楽しむ力」「社会を共に生きぬく力」の基礎を身につけ、自分がやりたいこと、好きなことを発見することを目的とする。 |
| 対象        | 自国において十二年の教育課程を修了し、2 年間の経費支弁が可能な者  |
| 入学時期      | 4 月  |
| 総学習時間     | 1560 単位時間 <sup>6</sup> (1 年 780 単位時間×2 年)  |
| 入学時のレベル想定 | A1<br>自国で日本語能力試験 N5 もしくは、それに準じる試験に合格している者。また、自国の日本語教育機関において 150 時間以上日本語教育を受けた者   |
| 課程の到達目    | B2   |

<sup>6</sup> 1 単位時間=45 分



|          |   |
|----------|---|
|          | の。  |
| 課程の到達目標  | B2<br>大阪観光大学や他大学、もしくは専門学校に合格し、日本における生活に必要な日本語運用力、「自由を共に楽しむ力」「社会を共に楽しむ力」の基礎を身につけることができる。   |
| 入学後の学習予定 | <p style="text-align: center;">1年目 4月 5月 6月 7月 8月 9月 10月 11月 12月 1月 2月 3月</p> <p style="text-align: center;">A 2.1 A 2.2</p> <p style="text-align: center;">2年目 4月 5月 6月 7月 8月 9月 10月 11月 12月 1月 2月 3月</p> <p style="text-align: center;">B 1 B 2</p> |

表-5 大阪観光大学別科におけるコース概要 (1年コース)

|           |   |
|-----------|---|
| 目的        | 本コースは中国における大学及び、大専 (3年制大学) に在籍している学生を受け入れる。弊社と協定を結んでいる大学、大専の学生が最終学年の1年を本別科で日本語を学び単位認定を行う。中国の大学、大専卒業後に、大阪観光大学への入学、もしくは編入を目指すコースである。また、本別科の1年の課程で、本別科の教育目標である「自由を共に楽しむ力」「社会を共に生きぬく力」の基礎を身につけ、自分がやりたいこと、好きなことを発見することを目的とする。                  |
| 対象        | 大阪観光大学別科と協定校の大学生及び、大専生 (中国の短期大学生)   |
| 入学時期      | 4月、10月  |
| 総学習時間     | 780 単位時間  |
| 入学時のレベル想定 | A2<br>自国で日本語を学び、基礎段階の学習が終了し、N4 相当以上の日本語力を有していると判断されるもの  |
| 課程の到達目標   | B2<br>大阪観光大学や他大学、もしくは専門学校に合格し、日本における生活に必要な日本語運用力、「自由を共に楽しむ力」「社会を共に楽しむ力」の基礎を身につけることができる。   |
| 入学後の学習予定  | <p style="text-align: center;">4月 5月 6月 7月 8月 9月 10月 11月 12月 1月 2月 3月</p> <p style="text-align: center;">B 1 B 2</p> <p style="text-align: center;">10月 11月 12月 1月 2月 3月 4月 5月 6月 7月 8月 9月</p> <p style="text-align: center;">B 1 B 2</p> |

2025年4月からのコースにおける特徴は前章で述べた教育理念・教育目標を取り入れ、別科における学習を明確化したことである。また、認定日本語教育機関申請に向けて求められる「到達目標」「入学時のレベル想定」「入学後の学習予定」も詳しく記した。

各コースによって、別科における学習時間が異なるため、入学者の募集時から日本語レベルに条件を付している。また、いずれのコースにおいても別科の課程修了時には大学進学に必要な B2 レベル<sup>7</sup>となるようにコース

<sup>7</sup> 『日本語教育機関認定法 よくある質問集』 ([https://www.mext.go.jp/content/20240402-ope\\_dev02-000034833\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20240402-ope_dev02-000034833_1.pdf)) P.39 に「大学や専門学校等、高等教育機関への進学を目標とする課程については、日本語能

をデザインした。コースにおける目標を明確にし、またそれを学生に伝えていくことで、学生がモチベーションを維持し、より主体的に学習に臨めるのではないかとと思われる。

## (2) 新カリキュラムの概要

別科における新カリキュラム作成にあたって、教育理念・教育目標における「楽しむ力」「生きぬく力」をどのように日本語教育に落とし込んでいくのか課題であった。

山田(2023)では「楽しむ力」について、観光学教育の視点から『「人間の基本的欲求」としての「鑑賞・創造・交流活動」する力をいかに高めるか』と述べており、更に「鑑賞・創造・交流活動」において、「コミュニケーション力が大きな役割を演じる」ことになるとしている。更に「生きぬく力」について、現代社会は、競争原理が支配しており、常に対峙しなければならず、厳しい現実を「生きぬく力」が必要であると述べている。

別科においてはこの「楽しむ力」「生きぬく力」の基礎を築いていくという目的で、「コミュニケーション」そして、「現代社会」をキーワードとしてカリキュラムを作成した。

### 1) A1・A2①レベルにおけるカリキュラム

来日したばかりで日本語も拙い学生にはまず「クラスという社会」の醸成及び、「地域社会」に目を向けることを主眼としたカリキュラムを作成した。クラスにおいてコミュニケーション、協働学習を通じて、「社会意識」を育み、アクティブラーニングを通じて、日本語の主体的な学習を促すことにした。

別科には「総合日本語」「試験対策」「口頭表現」「文章表現」「日本事情」の5つの科目があるが、A1・A2①レベルでは「総合日本語」「口頭表現」「文章表現」の3科目の教材として、『つなぐにほんご初級』（アスク出版）を採用している。『つなぐにほんご初級』では「ねらい」を以下のように記載している。

『本書は、学習者が日本語を使って社会活動に必要なコミュニケーションが「できる」ようになることを目標としたテキストです。学習する場面は、学習者が実際に日本語でやりとりをする必要があると思われる場面を、会社、学校、生活から選びました。本書は社会活動ができることを目標にしていることから、ことばや文法が「わかる」ことより、日本語を使ってコミュニケーションが「できる」ことを優先して学習を進めます』

(『つなぐにほんご初級1』P.8より抜粋)

以上のように、本教材は別科の教育理念、教育目標を達成していくために、必要な「コミュニケーション」「社会意識」を育む教材として適切であると考えられるため、別科ではA1・A2①レベルでは上記教材を採用し、2025年4月より本教材を用いた教育を開始している。

なお、以下はA1・A2①レベルにおける授業の様子である。

---

力の到達目標はB2以上とすることが必要です」と明記されており、別科においても全てのコースにおいてB2レベルを到達目標として設定した。

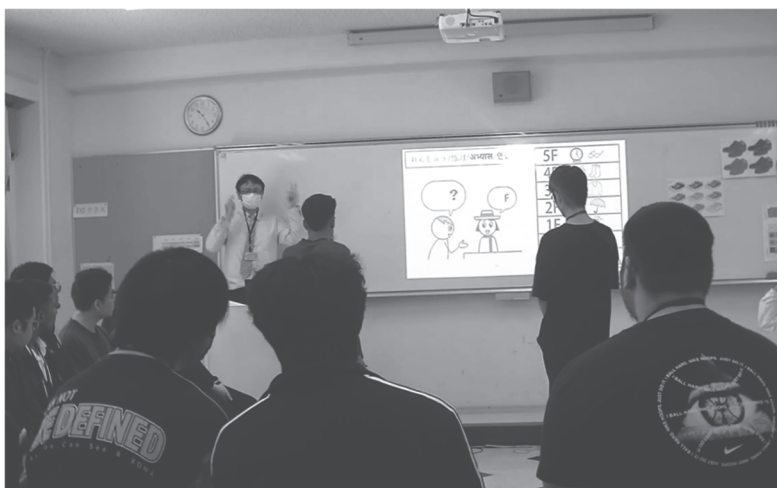


写真-1 A1 レベルの授業風景 (2025/4/21 撮影)

写真 1 のように A1・A2①レベルにおける『総合日本語』はコミュニケーションに特化した授業となっており、机や本等を取り払い、学生が場面におけるやりとりを中心とした授業となっている。学生は本授業を通し、コミュニケーション力が向上し、学生同士の協働力を身に付けることができると考えられる。

## 2) A2②・B1・B2 レベルにおけるカリキュラム

日本における学習が進み、A2 レベル相当の日本語力、そして社会意識が身についた学生は昇級し、A2②レベル→B1 レベル→B2 レベルとなるが、A2②レベル以上の学生が目指すのは日常的なコミュニケーションだけではなく、「社会的な内容について議論できる力」や、それを可能とする日本語力の向上である。更に、「社会意識」の目線も、「地域」から「日本社会と自国社会」そして、「国際社会」へと昇華させていくことが求められる。別科におけるカリキュラムも以上の考え方に沿った教材を採用した。『総合日本語』で採用したのが、前述の『つなぐにほんご初級』のシリーズ教材である『人と社会をつなぐ日本語 中級』（アスク出版）及び、『人と社会をつなぐ日本語 上級』（アスク出版）である。『人と社会をつなぐ日本語』では「考え方」として以下の 6 つの考えを示している。

- ①問題を遂行する中で学習を進め、社会で活動する力を育てます
- ②5つの技能を統合して活動し B1 レベルの日本語力を育てます。
- ③「社会人基礎力」と「社会人技術力」を育てます。
- ④協働学習により、自立的、自律的、主体的に学習を進め、ディープ・アクティブラーニング<sup>8</sup>を行う力を育てます。
- ⑤複言語・複文化のコミュニティーで生きる「市民（シティズン）」としての意識を育てます。
- ⑥文字情報をもとに活動する力を育てます。

(『人と社会をつなぐ日本語 中級』P.6-7 より抜粋)

以上のように、A1・A2①レベルのカリキュラム同様、別科の教育理念、教育目標を達成していくために①～⑥の考え方は重要なピースであるため、この教材を採用し、A2②・B1・B2 レベル同様に、2025 年 4 月より教育を開始している。

<sup>8</sup> 松下(2015)によると「ディープ・アクティブラーニング (deep active-learning:DAL) とは、学生が他者と関わりながら、対象世界を深く学び、これまでの知識や経験と結びつけると同時にこれからの人生につなげていけるような学習」と定義している。

更に、A2②・B1・B2 レベルでは他の科目においても「社会」や「コミュニケーション」を意識した授業活動を取り入れている。特に、「日本事情」では座学と共に、フィールドワークも開始している。B2 レベルでは「日本事情」のテーマに沿って、実際に現地に赴いたり、見学を行ったりしている（現在、計画中のものも含まれる）。

表-6 B2 レベルにおける主なフィールドワーク

| 日本事情のテーマ | フィールドワーク                         |
|----------|----------------------------------|
| 教育       | 高校や保育園を訪問し、授業見学や日本人学生（園児）と交流を行う。 |
| 歴史       | 堺市の大仙古墳に行き、博物館や公園を散策する。          |
| 経済・産業    | 泉佐野市のタオル工場を見学し、工場の人に質問する。        |



写真-2 大仙古墳でのフィールドワークの様子（写真は 2024 年訪問時のもの）

このような活動には「楽しむ力」を育む上で、重要な「鑑賞・創造・交流活動」する力を高めることに重要であると考えられる。フィールドワーク以外の活動においても学生同士で「創造力」を養う内容を含め、学生が別科在籍中に、「楽しむ力」「生きぬく力」の基礎を築けるように改編した。

### 3) 学生の日本語レベルの評価

別科では日本語教育機関であるため、学生の言語活動を正に評価することが求められる。『認定日本語教育機関日本語教育課程編成のための指針（令和 6 年 10 月 15 日改定）』においても、「評価方法は、単元ごとのテストや定期試験に限定せず、必要に応じて、パフォーマンス評価、自己評価、他者評価、成果物提出など、形成的評価、総括的評価を授業の目的と照らして適切に組み合わせて、必要な評価ツールを用いる。」と明記されている。そこで、学生の言語活動を正しく評価するために各科目において、評価すべき言語活動を明確化し、試験による評価だけではなく、「パフォーマンス評価」「自己評価」「ポートフォリオ評価」など、様々な評価を行い、学生の日本語レベルを正しく評価できるシステムを整えた。

以下が 2025 年 4 月より別科において取り入れた評価の一例である。

表-7 2025 年度大阪観光大学別科における評価の種類と比率

| 評価内容                                 | 比率  |
|--------------------------------------|-----|
| パフォーマンス評価<br>(学生の 5 技能のパフォーマンスを評価する) | 40% |
| 試験<br>(中間試験・期末試験で評価する)               | 30% |
| 講師評価<br>(授業に入っている教師が主観で評価する)         | 15% |
| 自己評価<br>(学生が自分の学習について進行具合を評価する)      | 10% |
| ポートフォリオ評価<br>(自身の振り返りや成果物で評価をする)     | 5%  |

また、パフォーマンス評価では、各レベル、各科目によって評価する言語活動が異なる。以下がパフォーマンス評価において評価すべき言語活動を定めた。以下が各科目で評価する学生の言語活動である。

表-8 A1・A2①レベルにおけるパフォーマンス評価において評価する言語活動

| 科目名   | 言語活動 |              |            |    |    |
|-------|------|--------------|------------|----|----|
|       | 聞く   | 話す<br>(やりとり) | 話す<br>(発表) | 読む | 書く |
| 総合日本語 | ●    | ●            |            |    |    |
| 試験対策  | ●    |              |            | ●  | ●  |
| 口頭表現  | ●    | ●            | ●          |    |    |
| 文章表現  |      |              |            | ●  | ●  |
| 日本事情  |      | ●            | ●          |    | ●  |

表-9 A2②・B1・B2 レベルにおけるパフォーマンス評価において評価する言語活動

| 科目名   | 言語活動 |              |            |    |    |
|-------|------|--------------|------------|----|----|
|       | 聞く   | 話す<br>(やりとり) | 話す<br>(発表) | 読む | 書く |
| 総合日本語 | ●    | ●            | ●          | ●  | ●  |
| 試験対策  | ●    |              |            | ●  | ●  |
| 口頭表現  | ●    | ●            | ●          |    |    |
| 文章表現  |      |              |            | ●  | ●  |
| 日本事情  |      | ●            | ●          |    | ●  |

パフォーマンス評価は授業内で行うが、評価する言語活動は表 2、表 3 のようにレベルと科目によって異なる。A2②・B1・B2 レベルの「総合日本語」では使用教材の特性上、すべての言語活動において評価する機会を設けた。パフォーマンス評価を実施することにより、学生の現在のレベル把握が容易になり、更にルーブリックを用いて評価を行うため、学生もどの学習活動がどのように劣っているのかが明確になり、自律学習にも繋げていく効果にも期待できるのではないかと考えられる。

## 4. 成果と課題

### (1) 成果

前章のカリキュラムの改編を踏まえて、2025年4月から9月にかけて新カリキュラムにて別科の授業を行った。認定日本語教育機関申請に向けて、『日本語教育の参照枠 報告』(2021)やCEFR(2001)に基づいた尺度で行うことができたことで、常勤講師、非常勤講師ともに知見を得ることができた。更に、評価について常勤講師、非常勤講師の間で以前よりも対話が多く発生するなど、教員同士のコミュニケーションを深めることができた。また、パフォーマンス評価を通じて、学生の言語活動レベルが可視化されることによって、学生個人の日本語レベルの問題への把握が容易になった。

### (2) 課題

一方で、新カリキュラムにおける授業実践を通じて、多数の問題点が生じた。一つは急なカリキュラム変更により、教員の負担増である。パフォーマンス評価を増やしたことにより、試験だけではなく、日頃の評価に対するルーブリックの作成や、評価方法の非常勤講師への指導等にかなりの時間を要した。二つは、研修不足による教員全体への共有不足や、教員に対する指導不足である。現在、カリキュラムの改編とともに、教員に対する研修体制の確立も急いでいるが、まだ道半ばである。しかし、研修体制の確立は認定日本語教育機関において認定に関わる重要課題であるため、この課題には急ぎ取り掛かる必要がある。以上の二点の改善により、別科における日本語教育のクオリティがより高まっていくことになると考えられる。

## 5. おわりに

本稿では別科における教育理念・教育目標・教育方針の作成、また、カリキュラムの改編について述べてきた。別科における目標は学生の日本語力向上はもちろんであるが、大阪観光大学への内部進学者を増やすことも目標である。しかし、学生を内部進学させることがゴールというわけではない。学生が大学での学びについていくための基礎的な日本語力、そして、将来を見据えて「楽しむ力」「生きぬく力」の基礎を別科在籍時に築くことこそ重要である。そのためには教育システムの整備が求められる。更なるカリキュラムや評価の改善、そして、教員への研修体制の確立を追い求めていく必要がある。今後は、実践の中から得た知見をもとにしたカリキュラムの改善や別科の組織体制や研修体制の改善に注力していく。

### 【引用・参考文献】

- 青木直子・中田賀之(2011)『シリーズ言語学と言語教育 23 学習者オートノミー-日本語教育と外国語教育の未来のために-』, ひつじ書房
- 櫻井直子・奥村三菜子(2021)「CEFR Companion Volume with New Descriptors における「仲介」に関する考察」,『日本語教育』178巻,PP.154-169
- 文化審議会国語分科会(2021)『日本語教育の参照枠 報告』,  
[https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/kokugo/hokoku/pdf/93736901\\_01.pdf](https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/kokugo/hokoku/pdf/93736901_01.pdf) (最終閲覧日:2025-11-29)
- 松下佳代(2015)『ディープ・アクティブラーニングー大学授業を深化させるためにー』, 勁草書房
- 文部科学省日本語教育部会(2024)「認定日本語教育機関日本語教育課程編成のための指針(令和6年10月15日改定)」,URL:  
[https://www.mext.go.jp/content/20241015-mxt\\_nihongo01-000034783\\_2.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20241015-mxt_nihongo01-000034783_2.pdf)(最終閲覧日:2025-11-29)
- 山田良治(2023)「観光学の確立と新たな観光学教育の発展に向けて」,『大阪観光大学研究論集』第23号,pp.81-87
- Council of Europe (2001) Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment. Cambridge University Press.,URL: <https://rm.coe.int/common-european-framework-of-reference-for-languages-learning-teaching/16802fc1bf>(最終閲覧日:2025-11-29)